
へたりあようちえん。～世界がもし一つの幼稚園だったら～

陸点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へたりあようちえん。～世界がもし一つの幼稚園だつたら～

【著者名】

Z68550

陸
点

【あらすじ】

超エリートヒーローントのコスモスの次なる任務先は 幼稚園！？ しかもそここの幼児たちは何故かヘタリアキャラにそつくりで……！？ ヘタキャラ全員幼児化！ ロリシヨタパラレルぐだぐだコメディです。

転勤先は、幼稚園（前書き）

コスモスさん幼稚園に左遷されるの巻

転勤先は、幼稚園

「コスモス。君をここに呼んだのは、他でもない、君にしかできない仕事があるからだ」

とある国とのある会社のとあるオフィス。そこに勤める一介の会社員である私は、暗い部屋、ブラインド、高級そうな家具、といかも社長室っぽい社長室に呼び出されました。

「君にはしばらくの期間、ある要人たちの護衛をしてもらいたい」
社長室の主、つまりは社長であるボス（本名は知りません。ここは私を含め大抵の方が偽名を使うのです）が、顔を絶妙な陰で隠しながらそう言いました。

「『しばらくの期間』とは、どれ程の期間ですか？」

「わからん。先方は、『なるべく長い期間』とは言っていたが、具体的な指定はしなかつた。まあ、君ほど優秀なエージェントならば、どうとでも融通ができるだろ？」

まるで答えになつていません。あと、人がせつかく秘密っぽい感じを出そうとしているのに、軽々しく『エージェント』とか言わないでください。

「わかりました。では、護衛する要人とは、どういった人物なのでしょうか？ 複数人いるのはわかりましたが……」

「こういう仕事を請けるとき、確認を怠つてはいけません。前に確認し忘れて、三ヶ月もの間ある絶滅危惧種の群れ、総勢七百頭を密猟者から守りきるという壮絶な仕事を請けてしまつたことがあります。給料はたつぱり貰えましたが、あんな仕事はもうつづりです。」

「幼稚園児、だ」

「…………、え？」

一瞬、ボスが何を言つてているのかわかりませんでした。幼稚園児

？ キンダーガートナー？

「君が驚くのもわかる。何しろ今までに請けた要人護衛の中でも最

年少だからな。だが、これはとても重要な仕事だ

「…………どういふ、ことでしようか」

「二ホンのト・ウキヨウに、世界各国の要人の子や孫のみを預かる幼稚園が存在する。ゆくゆくはその国の未来を担う人材だからな。一ヶ所に集めて英才教育をしようという話らしい」

それだと逆に、テロリストに狙われやすくなるような……。一步間違えれば外交問題になりかねません。

「だからこそ、君が呼ばれているんだろう。今までは先方でどうにかできていたそうだが、ここ最近は手に負えなくなってきたそうだ。そこで、優秀なエージェントの若い女性を保育士として提供してほしい、とのことだ」

「…………私を優秀なエージェントとして認めてくださっていることはとても嬉しいのですが……残念ながら、この仕事は請けられません」

私は子どもが苦手です。とりわけ、大人の言つことを聞かず遊び暴れ回るような年齢の子どもは、想像するだけで疲れてしまいます。それなのに、私に子どもの面倒を（たとえ、形だけでも）見ろだなんて！

「ああ、君がそう言つと思つて、既に請けさせておいたよ
どんつ…………と、ボスが分厚い書類をデスクの上に投げました。

一番上には、短い文面の書かれた契約書。

『私、コスマス・ストレージは、無期限でこの仕事を請けることをここに誓います』　『トニーに、書いた覚えのないサインとともにに

！

「な、え、あ…………？」

「バッドラックだ、コスマス」

茫然とする私の肩をぽん、と叩き、ボスは部屋から出ていきました。

「…………理不尽にも程があります…………」

…………「つして、大変不本意なことに、私ことコスモス・ストレージは、二ホンという国で保育士の真似事をする運びとなつたのでした。

二ホン語よし、保育士免許よし、登録よし、必要最低限の日用品よし と。

登園（保育士側も、この表現でいいのでしょうか）の田の朝、私は当面の間の住居として支給されたアパートの一室で指差し確認をしていました。

なんにしても確認だけは怠つてはいけません。それが私の信条なのです。

怠るといつゝとは油断であり、油断は失敗に繋がります。私が普段やるような仕事には失敗が許されないので、日頃からいつやって習慣付けていいるのです。

一通り確認が終わり、二ホン語の发声練習をし、その他諸々（食事等）を済ませ荷物をまとめ、いよいよ出発です。

と、いけないいけない。大事なものを忘れていました。

クローゼットの中からエプロンを取り出し、きちんと身上につけます。

やつぱり、保育士さんといえばエプロンですよね。

そうして私は玄関のドアを開け、異国の幼稚園へ向かうべく足を踏み出しました。

…………数歩歩いて、まだエプロンで出歩く必要はないと気づき、慌ててエプロンを鞄の中へしまったのは、オフレコにしてください。

転勤先は、幼稚園（後書き）

と、いうわけで『へたりあようちえん。』もしも世界が一つの幼稚園だつたら』が始まりました。

まだプロローグで、ヘタキラは誰も出演してないけどな！

本作は別作品の学園モノとは別に、コスモスさんというオリジナルキャラ主人公の一人称で語っていきます。

最初は普通の幼稚園モノの予定だつたんですが、面白がつてコスマスさんに色々設定を付け加えていつたらあんなことになりました。どうしてこうなつた。

機会があつたらコスマスさん主人公のオリジナル作品を書きたいですね。

次回からはいよいよ幼稚園で、幼児化したヘタキラがでますよ、多分。

“要人の幼児”というダジャレは使わなくて本当によかった……。

アクの強そうな子たちですね……（前書き）

「スモスさん個性豊かな園児にびびるの巻

アクの強そうな子どもたちですね……

「……とこ‘うわけで、今日からこ‘こで働くことになりました、コスマスと言‘ます。まだ色々と慣れていませんが、‘じつかよろしくお願いします」

家を出て数十分後。私は幼児に囲まれていました。

世界各国の子どもたちを集めたとあって、髪も眼も肌も様々で、まるでここだけ一ホンではない別の国のようにです。

「（ちょっと、「コスマスさん。子どもたち相手に堅すぎるわよ。」

隣の小藤先生（私より一、三つ先輩の先生で、園長先生からはこの人を頼るようになされました）が、小声で注意してきます。

「（はあ。なにぶん、こんなにも小さな子どもたちと会話したことがないもので……すみません）」

「（……あなた、本当にイギリス人？　ずいぶん日本語ができるのね）」

「（ありがとうございます）」

小藤先生とひそひそ話に花を咲かせていると、子どもたちの方から声が上がりました。

「ねえ、コスマス先生は前はど‘こで働いてたの？」

見ると、そこには金髪碧眼で、分け目にぴょんと出たくせ毛と好奇心の強そうなくりくり眼が特徴的な男の子が。

「えつと、君は……」

「アルフレッド。アルフレッド・ジョーンズだよ」

にこ‘と微笑んで答えてくれるアルフレッドくん。長いので、アルくんと呼びましょう。

しかし、どう答えたものでしょうか。“エージェント”だのなんだのがこの年頃の幼児にわかるとは思えませんし、そもそも自分たちが“守られる対象”だということも、恐らくはわかつていないです。

ですから、ここはあえて抽象的に答えることにしました。

「悪い人をやつつけて、弱い人を助ける正義の味方をしていました」そう答えると、子どもたちが「おお……」とじよめきます。特にアルくんは眼をキラキラと輝かせました。

「すごい！ ねえ先生、正義の味方ってどうすればなれるの？」

一瞬、「なれねーよ！ スーツアクターにでもなれ！」などと意地悪を言おうかと思いましたが、そこは抑えて、笑顔笑顔。

「好き嫌いなくご飯を食べて、よく寝てよく遊べば、なれますよ」

今度は「ええ～～～～」という声が。駄目ですよ、好き嫌いはなぐさなきゃ。今はよくても、大人になつたとき色々と不便しますから。

「ねえ、先生の好みのタイプは？ できれば、スリーサイズも教えて」

……ずいぶん、ませた質問が来ましたね。誰でしょう、声の主は。少し探すと、アルくんから少し離れたところにいる、さらさらした金髪で整つた顔立ちの彼がそうだとわかりました。

「（フラン시스くんよ。あんな可愛い顔なのに、平気でセクハラしつくるから、気をつけてね）」

小藤先生が耳打ちで名前を教えてくれました。それにしても、イタズラではなく、セクハラですか。確かに厄介そうです。

「好みのタイプは、頼り甲斐のある、安心して背中を預けられる人ですね。スリーサイズは、秘密です」

「じゃあ、当ててあげようか。上から、69ぐはあッ！」

フラン시스くんが私のスリーサイズを言おうとしたとき（恐ろしいことに、バストは完全にあつっていました）、突然横からフライパンのようなものが物凄い速さで投げつけられました。

「フラン시스！ てめえ女人になに訊いてんだよ！ このボケ！」どうやら、フライパンを投げたのは、長めの茶髪を縛つた勇ましい顔つきのあの子のようです。

「いてて……なにするんだよ、エリザ～。俺の顔が変になつたらどう

うするんだ……」

「ヒリザつて呼ぶなー！」

怒ったエリザくん（？）がさらにフランシスくんの顔を殴ります。
あれですか、あれが流行りの「そのキレイな顔を吹っ飛ばしてやる
！」ですか。

「あれ、ヒリサベー・タちゃん。れっきとした女の子なんだけれど、なんでか自分を男だつて思い込んでるのよ……」
なるほど、女の子だつたんですね。どうりで名前が可愛らしくて思いました。

ヒリサちゃんとアランシスくんの喧嘩はヒートアッフして、周りの血の気の多そうな子どもたちが次々と参戦していきます。

「…………… サテイク、死ね……………」

「へりえ！ ブリタニアフォーク！」

あいやーー、母國三千年の歴史を見せてやる

「褒めろ!! 賛えろ!! 俺に跪け!! !! !!

「兄さん結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚」

……なんというか、もう、地獄絵図って感じです。

「小藤先生、あれ、止めなくていいんですか！？」

あれが二つ目のレトロ…………だと…………！？

「アーネスト、エリザベスの子どもたちを見た感想は」

小藤先生がこれまで編めとはかりに話しておます
それですね

「……アグの強そうな子どもたちですね……」

私は、今日からJ-1でわざわざと働いていけるのでしょうか……？

アクの強そうな子どもたちですね……（後書き）

と、いうわけで『へたりえん。（今思いついた略）』の第一話（実質第一話）です。

書いている途中でキャラが不足していることに気づき、慌ててオリキャラとして出したのが小藤さん。苗字なんか名前なんかよくわからぬ彼女はこれから一体どういう運命になるんでしょう。案外ヘタリア好き（腐女子）で子どもたちの言動に一々萌えてるのかも。

どうでもいいですね。

やつと幼児化ヘタキャラ出せましたよ。いやあ、これ書いたの実質一日なのに妙に長く感じました。

ところで、アメリカとかハンガリーさんとか、幼少期と現在のキャラが違う人は扱いに困りました。結局、幼少期を優先しましたが、多少なりとも現在への伏線といつか片鱗を出していきたいです。

そういえば、元からちびキャラなシー君やワイちゃん、色々と微妙な立場の神聖ローマはどうしよう……？

「タリアってなんですか? (前書き)

「スマスさん腐女子に引くの巻

ヘタリアってなんですか？

子どもたちへの紹介が終わつた後、私は小藤先生に幼稚園を案内してもらつていきました。

「ここが年長さんの部屋、ここが年少さんの部屋、あつちが集会所、そつちが食堂といった具合に、幼稚園の大まかな造りを次々に頭に叩き込んでいきます。

「で、ここが職員室ね、さつきも来たけど。机の場所はもう覚えた？」

頷くと、「……あなた本当に飲み込みが早いわね……」と咳き、小藤先生は私のではない机の前で立ち止まりました。無数の漫画本やアニメのようなイラストが表紙の小説がうず高く積まれたそこが、どうやら彼女の席のようです。

ただ、少し気になつたことは その漫画や小説の表紙のイラストに、やけに男性が抱き合つたり見つめあつたりしているものが多いことです。

「ああ、これ？ Bし本よ。私、“腐女子”なのよね」

私の視線に気づいたのか、小藤先生が謎の単語を交えて説明してくれました。

「……“フジヨシ”、とはなんですか？」

「あ、そつかもだ日本に来たばかりだから知らないのね。男同士の恋愛、いわゆるBしをこよなく愛する女の俗称よ。“腐った女子”つて書いて、婦女子と掛けてるのよ。掛け算だけにね！」

何か上手いことを言つたみたいですが、正直私にはよくわかりませんでした。

「つまり、ホモセクシャルな男性がお好きなんですね」

「うーん、間違つてはいないんだけど、ニコアンスがねえ……。まあ、深く考えなくていいわ。どうせヤマもオチもイミもないんだから

「ら

自分で言つた言葉にくすくす笑いながら、小藤先生は「そういえば、」と本の山から大判の漫画本を引っ張り出しました。

「『Jの漫画』知ってる？ ヘタリアっていうんだけど」

その漫画本の表紙には、三人の男性が軍服らしき服装で、それぞれポーズをつけて並んでいる絵が描かれています。私は漫画やイラストには詳しくないのですが、背景やアクセントとして描かれたパターンがポップで可愛らしかったです。

「いえ、私はあまり漫画を読まないので……」

たまに読んでも『ピーナッツ』みたいなかなりデフォルメされたものか、アメコミのようなリアルな絵柄なものしか読んだことがありません。『Jの漫画』日本独特の“OTAKU”的な絵はちょっと苦手です。

そういうふた旨を言葉を選んで伝えると、小藤先生は少し残念そうな顔をしました。

「そう……。まあ、漫画をよく知らないなら、しょうがないよね」

そして、小藤先生が“ヘタリア”について教えてくれました。

国家を擬人化（思えばどんでもない発想ですが、二ホンではそう珍しいことでもなく、他にも食品や駅などを擬人化したアニメもあそうです）した漫画で、例えばイタリアはナンパ好きのヘタレ男、ドイツは真面目で厳格、二ホンはミステリアスで謙虚といった、ある種ステレオタイプなキャラクターが沢山登場するのだそうです。魅力的な男性キャラクターが多いことからフジョシに入気が高く、しかし女性キャラクターも非常に愛らしく最近は多方面から注目されているのだとか。

ですが、なんでこんなことをいきなり？

「実はね……この幼稚園の子たち、ありえないくらいヘタリアのキャラにそつくりなのよ！！」

小藤先生が突如絶叫しました。私もふと、「な、なんだつてーー！」と叫びたくなりました。

「そうなんですか。それはびっくりですね」

「あれ、意外に反応薄い！？ だつてあれだよ、漫画キャラにそつくりな幼児がこんなに近くにいるのよ！？ 新手のスタンド使いよ！？ ウンガロとアレッシーで挟み撃ちのかたちになつたのよ！？」
興奮しまくし立てる小藤先生。残念ですが、やつぱり私にはよくわかりません。

「まあ、確かに凄い偶然だと思いますが、個人的には『だからなんなんだ』と言いたいですね」

「ここにきてコスモスさん『テラ冷たい！ まるで私が馬鹿みたい！』
『え、馬鹿じやなかつたんですか？ すみません、誤解してました』
『何故会つて数時間の人間にここまで毒舌を！？』

「おつと。いけないいけない。ついいつもの癖で他人を罵倒していました。謝らなくては」

「すみません。なんだか場の流れがおかしな方向にいきそつたので、小粋なアメリカンジョークで和ませようと思いまして」

「え？ イギリス人じやなかつたの？」

「間違えました、イングリッシュジョークです。ブリティッシュジョークでも可です」

「なんかさりげなくイギリスを敵に回しそうな発言ね……別にいいけど」

やれやれ、どうにか誤魔化せました。

「まあ、キャラクター云々はともかく、一度読んでみて？ 面白いし、性格もそつくりだから勉強にもなるし」

小藤先生が先ほどの漫画本と、さらに表紙がちがうもう一冊を重ねて私に渡しました。シリーズものだったのですね。

「はあ、時間を見つけて読んでみます。なるべく早く返しますね」

「ああ、いいのよ。それはあげる。布教用のだから」

「布教？ 小藤先生は伝道師だったのですか？」

「オタクと腐女子はいつだつて、萌えの伝道師なのよ！」

「……意味がよくわかりませんが、ありがとうございます」

じつして私はヘタリアを知り、小藤先生の人となりをなんとなく

理解しました。

後々この出会いが、私を東京ビッグサイトという戦場へ無理矢理導いていくことになるのですが、それはまた別のお話です。

ヘタリアってなんですか？（後書き）

というわけで『ヘタリえん』 第二話です。
またヘタキヤラ出なかつたよ！

今回は普通に幼稚園とヘタリアの紹介をする予定だつたのですが、
なにがとち狂つたのか小藤さんの腐女子回になりました。
小藤さんは明るく健全な腐として描いています、多分。私の「こ
ういう腐さんなら仲良くなりたい」像を反映しています。

いや、実際本物の腐さんと出会つたことがないんですね。ツイ
ッターでお話したことはありますが。

なにが彼女たちをBLへと導いているんでしょうか。知りたくも
あり、知りたくもなしです。

そんなわけで、当小説は感想・リクエストと共に腐さんの「」意見
を募集しています。

BLは書かないの（というか、書けません。精神が持ちません）
、そちらの意見は取り入れられませんが、腐女子はこう考える、こ
ういうシチュエーションならば萌える、などの「」意見を参考にさせ
て頂きます。

……なんか小藤さんの話からえらい方向に話がずれたな。まあい
いか。

とにかく、今後とも当小説を読んでくださいたら幸いです。

樂.....圓.....? (龍書き)

「スマスマさん」に田覓ねるの巻

樂園？

さて。今はおゆうぎの時間。園内の少し手狭なお庭で、たくさん
の子どもたちが遊びまわっています。

ただ、その遊んでいる内容が……。

「ロヴィーノー、コンキスタードール！」せえへん？ 僕ピサロな
！」

「えー、俺そんなのやりたくないじゃー。わつと面白このな
いのかー！」

何をビビりする！」遊びなのか字面からせりばつわかりません。
禍々しい響きはするのですが。

「パンダいらんかねー、この幸せのパンダを買えば幸せになれるあ
るよー！」

「や、そんな悪徳商法に騙されるかよー。騙されねえぞ……」

園内で物を売り買いしないでください。ていうか、そのパンダ、
ぬいぐるみですよね？ ワシントン条約には引っかからないですよ
ね？

「……」口にはすっかり変わってしまったねえ。キワミとか

ウマウマとかで盛り上がっていたあの頃が懐かしい……

「菊の起源は俺の国なんだぜ！ だからこのパソコンも俺がもーらつ
んだぜ！」

「やめてくださいー。そんなことをされたら私、畠田からどうやら
て生きていけばいいんですか！？」

園内にノートパソコンを以下略。カツアゲもやめなさい。あなたの
の国にはサスンがあるでしょう。

本当に好き勝手に暴れ回る園児たち。いつもこのを“野放図”と
か“地獄絵図”とかいうんでしようね。

そういうえば、小藤先生はこれについてどう思つてこるんでしょう
か。ふと氣になり、小藤先生のほうも見てみました。

う、うわあ。

小藤先生は……なんというか、眼の焦点が合わず、涎を垂らし、お茶の間の皆さんにはとても見せられない醜態を晒していました。なんか喀血しましたし。

「こ、小藤先生？ 大丈夫ですか？」

かなり声をかけがたい、というか声をかけたくない姿でしたが、まあ展開的に声をかけるべきかなと思ってかけてみました。

二二

すひひひ、と涎を吸い上げる小藤先生。拭いたほうが確実に早いと思うのですが。

で……そんな子たちが目の前で遊んでいるのかと思つと、嬉しくて嬉しくて、本当に楽園みたい……」

「またもや麻薬中毒患者のような顔になる小藤先生。何この人怖い。
わ、私は子どもたちの様子を見てきますねっ」

無理やり笑顔を作り、なるべく自然な速さで小藤先生から離れた。そのまま一緒にいると、なにか人として越えてはいけない線を越えてしまいそうな気がしたので。

私は小藤先生との付き合い方を真剣に考えるべきなのかもしません。

か。

と言つても……怪しいじつに遊びや物品購買インターネットカツアゲと、やつてこむことせつときとあまり変わっていませんね。

おや?

お庭の隅の垣根で、何か探しているのでしょうか？ すすり泣き

「どうしたんですか？」
何か、落とし物でもしたのですか？」

近寄り、声をかけてみました。顔はよく見えませんが、スマックに青いズボンを穿いているので、男の子なのでしょう。

その男の子が振り返ります。明るい茶髪のラテン系で、一本だけ跳ねた毛が特徴的な、一見女の子と間違えそうな顔つきの子でした。細めた眼からは大粒の涙がぽろぽろとこぼれ落ちます。

「うう……あのね、ボク、ルートとボール投げしてたんだけど、ボクが変なとこに投げちゃったから、ボールが無くなっちゃったの……」

男の子から少し離れたところには、ゲルマン系金髪碧眼の別の男の子が、ばつが悪そうに立っています。

「俺も探すつて言つたんだが、フェリシアーノが一人で探すといつて聞かないんだ……」

なるほど。大体わかりました。

フェリシアーノ君（長いからフェリ君でいいですね）とルート君がボール遊びに興じている際、誤つてフェリ君が見当違いの方向に投げてしまい、ボールがどこにいったかわからなくなつたみたいですね。

「そのボール、どういうものなんですか？」

「え……ああ、バレーボールぐらいの大きさで、猫の模様が書かれていた」

可愛らしいデザインですね。てっきりこここの子たちのキャラの濃さ的に、一面に白旗とかパスタとかジャガイモとかそんな模様かと思つてました。

「わかりました。それでは先生も一緒に探しましょう」

「えつ、でもボクが「お黙りなさい。貴方一人だけで探して見つかるはずがないでしょ？」現実を見据えてから駄々をこねなさい。いいですね？」

恥ずかしい話、私、フェリ君みたいに男で泣き虫な子が嫌いなんですよね。別に『男だからシャキッとしなさい！』なんて言つつもりはないんですが、いくら泣いたところで田先の問題は変

わらないでしょう？

だから、これはフェリ君への当てつけであつて、別にフェリ君の泣く姿にこの血が目覚めたわけではないんですからね。

「…………！」

私の言葉に怯んだのか、泣くのをやめきよとした顔でこちらを見てくるフェリ君。が、もうこの際どうでもいいです。

「というわけでルート君、貴方も探してください。それから、あつちのほうで遊んでいるトマトが好きそうなラテン系の一人と、パンダ売ってるアジア人とそれを買いつぶつてるアルビノ、パソコンを取り合つてるアジア人一人も暇そつだから手伝わせなさい。人海戦術です」

「あ、ああ……」

「返事は『はい』、でしよう？」

「は、はい……」

「よろしい」

そうして、ボール搜索大作戦は始まりました。

ルート君に指示して集めてもらつた子たち以外の暇そうな子にも手伝つてもらい、庭中を探し回りました。

そして、三十分後。

「先生、あつた！ ボールあつたよ！」

人海戦術の甲斐もあり、どうにか件のボールを見つけることができました。見つけたのがフェリ君ということがいまいち釈然としませんが。

「良かつたですね。きっと、手伝ってくれたみんなのお陰ですね」

「うん！ みんな、ありがとう！」

手伝つてもらつた子たちに次々と頭を下げていくフェリ君。あの手慣れた感は、将来小物になること間違ひなしでしょう。

「気にせんでもええよ、このくらい」「もーなくすんじゃねーぞ、このやろー」「次は気をつけるあるよつ」「また困ったことがあつたらいつでも俺様を頼つてくれよ、ルート、フェリシアーノちゃん

！」「見つかって何よりでしたね」「ボールの起源は俺の国なんだぜ！だから次は俺も誘うんだぜ！」

てんでんぱらばらに返しながら戻つていくその他の子たち。また

あの不毛なやりとりを繰り返すのでしょうか。

「ともあれ、見つかって本当に良かつたですね、フューリ君、ルート君」

「うん！」「ああ」

それはそれは嬉しそうに頷くフューリ君と、ぶつきらぼうに見えて実は微笑んでいるルート君。やっぱり子供もは笑顔が一番ですね。泣き顔は似合いません。

「そうですね。せっかくですからボール遊び、先生も混ぜてくれませんか？」

私の唐突な提案に、きょとんとした顔になる一人。が、それも寸の間のこと。すぐに頷いてくれました。

「はいっ！」

本当に、子どもは笑顔が一番似合いますね。

あ、いや、これは私がただ純粋にボール遊びをしたくなつたからあんな面倒なことをしただけで、べ、別に二人の笑顔が見たかつたわけではないですからねっ！？

“つんでれ”とかなにかではなくて！

樂園……？（後書き）

長っ。

そんなわけでへたりえん第四話です。いよいよコスモスさんの隠されし一面が姿を見せてきました。

今回、たくさん新キャラが登場しましたが……あまり説明する必要ないです。びっくりするほど話し方で判断できますし。強いていえはフェリとルートでしょうか。

フェリはまんまちびたりあです。でもスマック（しんのすけが幼稚園でよく着てるアレ）で男女の区別がついてしまって、女の子に間違えられるエピソードは出せないっぽいです。あ、でも演劇会とかの行事で女装させたりしてもいいかも。

ルートは……ドイツ+神聖ローマ÷2みたいな感じです。正直、個人的には神羅とドイツは別人だと思ってるんですが、幼少期のドイツがあまり想像できないので神羅で補ってみたりします。神羅もいざれ出したいんですけど……どうしようかな？　あ、他人に気圧されるルートは書いて楽しかったです。

解説しなかつた他の六人は大体原作通りです。起源の子が愛国精神を發揮してたぐらいですね。

あとは……コスマスさんのスペックの解説かな？　でも需要あんのかなこれ。まあいや、やっちゃん。

ウェーブがかつた赤毛のロングヘア。目は藍色。茶色いフレームの眼鏡着用。スタイルはかなりのもの、特に胸が大きい（ここ重要）。国籍はイギリス。だから（隠れ）ツンデレ。でもドS。紳士ではないので眉毛は普通。妖精は見えない。

こんな感じですかね。だからなんだって話ですが。次回のあとがきでは小藤さんの意外なハイスペックを紹介したいと思います。

えーと、あとは……ああ、そうだ。

この小説でのヘタキヤラは人名で登場してるんですが、人名がな
い人はどうしましょうかね？ やっぱり仮人名を作るしかないんで
しょうか。

ウクライナさんやリヒはライナさん、リヒテンで通つてますが、
それもあまりしつくりこないというか……リヒテンシュタインは苗
字ですし、ライナさんはもう他のヘタ小説で使つてるので、あまり
使いたくないんですね。

とかなんとか考えながらプロ竹見てたらなんじゅこじゅーつ！？
もう既に沢山の方から可愛らしい名前の候補が！？

イルーニヤ！ ソフィヤ！ アネルセン！ ルーカス！ ハリー
ル！ ゴヴェルト！ マキシム！ ツーツィア！ ラルフ！ 嘉龍
！ レオン！ 乙令！ イルーニヤ！ ソフィヤ！

思わず連呼するほどテンション上がりました。特にウクライナさ
んの名前マジ可愛い。可愛すぎて選べん。ひません、頑張つて決め
てください。wktkが止まりません。

そんなわけで、今回も読了ありがとうございました。またお会い
できたら幸いです。

箸とフォークとスプーンと（前書き）

「スマスさん箸に敗北するの巻

箸とフォークとスプーンと

お庭で田一杯遊んだ後は……お毎^じ飯の時間。

今日のメニューは白米と鯖の味噌煮と「チーズサラダ。びっくりするほど和風なメニューですね。

当然、食べるにはチョップステイクス、つまり箸を使うわけですが……。

……どうしよう。全然、物が摘まめません。

ああもう！ イライラします！ 大体なんで箸を発明した人は、こんな細い棒一本で物を掴もうと思つたんですかね！？ フォークで刺すとかスプーンで掬うとか他の選択肢はなかつたんでしょうか！？

「……」「スモスさん？ 箸が上手く使えないなら、フォークを使つてもいいんですよ？」

隣に座っていた木蓮先生（小藤先生と同じく先輩の先生。ただし、小藤先生より“少し”歳上だと）が泣きそうな顔でそう言いました。初めて見た時は思わず「何か悩みでも？」と訊いてしまいましたが、どうやらこの人は生まれつきこういう困り顔のようです。「いえ、こればかりは私のプライドが許せないんです。私、これでも物覚えが良い方だという自負があつたんです。それなのに、それがたつた一本の細い棒に敗れるなんて……ッ！」

「な、なんでたかが箸にそこまでつ！？ ほ、ほら園児たちもフォークとか使つてますし……ねつ？」

そりやあ、みんなフォーク使つてますけど……。

「あの子たちは子どもでしょ。食事に箸を使わない地域の子ですし。それに、東アジア圏の子たちはちゃんと箸を使つてるじゃないですか」

「なんでその言葉を自分に当て嵌められないんですか……っ？」

ほら、子どもたちも見てますしつ、と無理矢理木蓮先生に先つぽ

がフォークのよくなつた、不思議な形状のスプーンを握らせました。く、屈辱です……。

腹立ち紛れにご飯をスプーンでザクザク刺していると、ふと気づいたことがありました。

「そういえば、小藤先生は何処へ？」

「小藤さんなら、五分で食べ終えて子どもたちのよつすを見に行きましたよつ？」

速つ！

「ほら、あそこ。イヴァン君……あのマフラーの子と、ちつちつやくて髪がくしゃくしゃのライヴィス君の間に入つてますつ」

見ると、やや大柄の子がご飯を食べながら隣の小さい子の頭を……なんでしょう、なんというか……押さえつけて潰しているよつでした。

小藤先生はその一人の間に立つて、妙に嬉しそうに「いらっしゃ、頭をぎゅつぎゅしちや駄目でしょ？」と大柄な子 イヴァン君を止めていました。

「あの人、いつもああなんですよ。『田の前にヘタキヤラ もとい可愛い子ども達がいるのに、悠長にご飯なんて食べていられませんよ!』と言つてつ」

……小藤先生。貴女の気持ちは私にはいまいちわかりませんが、ご飯くらいは大人しく食べましょうよ……。

「まあ、いつものことですしつ。コスマスさんは自分のペースで食べればいいですよつ」

「そうします……」

はあ。小藤先生の残念つぶりを見ていると、箸とかスプーンとかどうでも良くなつてきました。食べられればなんだつていいですね。

「……そういえば、メニューが思いつきり和風ですけど、子どもたちのほうで文句は出ないんですか?」

今日は比較的誰でも食べられそうですが、日本では「ビルフ

イッシュ タコを食べたり、異様な臭いのする“ナットー”や“クサヤ”なるものを食べたりするそ�です。

「うーん、あんまり文句は出ないです。みんな好き嫌いはそんなないですしつ。あんまり万人受けしないものは出さないと聞きますしつ」

「ほつ……。どうやら、ナットーは出ないようですね。もし出たらどうしようかと思いました。

「むしろ、私たちとしては少しくらい好き嫌いしてほしいぐらいです。ほら、見てください、あの金髪で眉毛が海苔みたいな子つ。あの子、アーサー君つて言つんですよ。いつもなんだか真つ黒い何かを持ってきて、それを“スコーン”だつて言い張つて食べてるんですけど、最近アル君とかギル君とか、他の子にもあげだして……」

「うわあ、確かにあれはスコーンです。思いつきり炭化してますけど……。どんな作り方したらあんな焦げ焦げのスコーンが作れるんでしょうね。スコーンは比較的、作りやすいおやつのはずなのに……。

あんなサムシング（個人的にはスコーンと認めたくありません）を作る人がいるから、イギリスはご飯が不味い国というレッテルが貼られるんですね……ちゃんと美味しいご飯を作れる人も（わずかですが）いるというのに……。

「アーサー君やアル君は平気みたいなんですが、ギル君はあれを食べた後食中毒で入院しちゃつて……それ以来スコーン（～）は持つてきちゃいけませんつて注意してるんですけど……」

ギル君……ああ、あのアルビノの子ですか。あの子、ああ見えて幸薄い子なんですね。不憫です……。

「だがそこがいい。だつてそれでこそ普憫だから」

「こつ、小藤先生！？ いつのまに隣に！？」

さつきまでイヴァン君たちの所にいたはずの小藤先生が隣に立つていました。凄い速さです、だつてまだあっちのほうに小藤先生の

残像が見えますもん。

「ふふ、ギル君の話題と聞いて思わず飛んできちゃったわ。相変わらずキャラの再現率が高いこと高いこと……」

またもや涎を垂らしそうになる小藤先生。ああ、この人はきっと幸せなんでしょうね。

「……えーと。とにかく一人とも、アーサー君からももらったものは食べないでくださいね。お腹壊したら困りますから」

「食べませんよ。子どもじゃないんですから……」

「むしろ食べます。アーサー君のプレゼントならなんだって……」

「「食べちゃ駄目ですってばっ……」」

「」のあと、謎のテロリスト（笑）によつて園内に開封済みのシユールストレミング缶を投げ入れられ、園内が軽いパニックに陥つたりもしましたが、それはまた別のお話、といつか次回にお話します。

箸とフォークとスプーンと（後書き）

またヘンテコ先生が増えました。へたりえん第五話です。前回の長さに反省し、少し短くまとめました。

そのせいでキャラが掘り下げられなかつ……げふんげふん。

まあとにかく、今回はあんま解説できるキャラがないので、早々に小藤さん＆木蓮さんのスペック紹介でも。

・小藤先生

本名：富士宮小藤。まいづるとなき日本人。
髪はによたりあの日本に似せた感じ。眼は黒。

一見おしとやかな大和撫子なので騙される男は多いが、本性はあの通りの腐女子。萌えすぎて涎垂らしたり「ぐへへ」とか言っちゃう残念な人。でも美人。胸は大きくはないけど、その方がコスプレが楽なので気にしていない。

腐属性さえ發揮されなければ眞面目な人。でも突然萌えシチュを思いついてハアハアしてしまつて周りから変な目で見られる一十三、四歳。特技は古武術。

・木蓮先生

本名：白木木蓮。よく付けられるあだ名は『ハクモクレン』か『目目連』。

髪はやや長いストレートを後ろでバレッタで留めている。垂れ気味の眼は暗い茶色。眉毛も下がり気味。

見た目は幸薄そうな美人。いつも泣き出しそうな顔をしている。でも意外とキレイ。見た目は誰よりも若いけど、実は年齢は一十代、ぎりぎり。“結婚適齢期”という言葉が何よりも憎いお年頃。今のところ唯一の常識人なので、腐な小藤さん、うなコスモスさんには囲まれてあたふたしてそう。

昔薙刀でトロフィーをとつたことがあつたとか。

……ていうかこれ需要あるのかな。あつたらしいなあ。あつてくださいお願ひします。

あ、この作品に出てくるオリジナルキャラの名前はみんな植物からとつてます。一目瞭然ですね。

そして、次回出でくるであろうテロリスト（笑）さん。この設定覚えてる人いるのかな。

この人はヘタキャラではありません。ですがオリジナルではなく、れつきとしたひまさんのキャラクターです。男で女装が似合つ傍若無人なあの人です。

これだけで大体特定されちゃうな。わかりやすすぎる。

テロリストさんは真面目にやると凄い重たいネタなので、その辺はライトにいきたいと思つてます。

この作品はフィクションであり、実在のヘタリア、人物、事件、団体、国家とは一切関係ありません。

そんなわけで、今回も読みあつがとうございました。またお会いできたら幸いです。

普通テロリストはセーラー服を着用しません（前書き）

ゴスモスさんテロリストに遭遇するの巻

普通テロリストはセーラー服を着用しません

それが起つたのは、みんなが食べ終わり、『「いやもう今までした』をして食器の片付けをしている最中のことでした。

ガシャン、と突然けたたましい音をたてて窓ガラスが粉々になりました。とつさに私は近くに居た子どもたちを伏せさせます。屈む寸前、小藤先生が黒い髪をおかっぱにした子を庇うふりをして思いつきり頬擦りをしたように見えたのは、まあ、気のせいでしょう。「セーラー服のひびき」とか聞こえたのも、きっと幻聴です。

子どもたちの頭を抑えながらゆっくり辺りを確認しました。見たところ、誰も怪我をしていないようです。私は子どもたちに「動かないで」と囁き、窓へ近づきました。

砕けたガラス片の中に、短い円柱型の金属が幾つか混じっていました。缶詰か何かでしょうか。どうやらこれを投げつけられたせいで窓は割れたようです。

缶詰を調べようと手を伸ばしかけたそのとき、妙な臭いが鼻につきました。なんと表現すればいいのでしょうか、腐りきった魚のような、捨てられないまま真夏に数日間放置された生ゴミのようなそこまで考えたとき、その缶詰の一つがガラス片で破損し、穴が開いていることに気づきました。

まさか、これは！？

「……シユールストレミング、だべ」

いつの間にか隣にいた、眼鏡を掛けた無愛想な北欧系と思われる男の子が呟きました。缶から漏れだす悪臭に眉一つ動かしていません。

シユールストレミング。スウェーデンで作られる、発酵したニシンの缶詰です。通常行われる殺菌がこの缶詰には一切行われず、そのため酷い時には缶が膨らむほどの悪臭が発生します。その臭いは

他のどこの発酵食品にもひけをとります、『世界一臭い食べ物』といふ異名を持つ食品です。

屋内、特に密室で開封すると大変なことになるのでほとんど輸出されず、一ホンではまずお目にかかる食べ物なのです……。

「何故、こんなところに？」

思わず首を傾げますが、今はそんな場合ではありません。少しづつ部屋が悪臭によつて侵略されていきます。既に気分を悪くしていふ子どももいるようです。早く、この缶詰をどうにかしなければ！

「木蓮先生！ 子どもたちを避難させてください！」

「えつあつはーつー！」

頭をくらくらさせていた木蓮先生が子どもたちを連れていき、この部屋に残つたのは私と、子どもたちがいなくなつて寂しそうな小藤先生と、それから隣の無愛想な子だけになりました。

………… て、あれ？

「べ、ベルヴァルド君！？ なんで残つてるんですか！？」

ベルヴァルド君 名前は、とっさに小藤先生の顔を見たら口パクで教えてくれました がしぬっとした顔で立つてゐるのに気づき、思わず声をあげました。

「食い物を粗末にする奴は、許せね」

それだけ言つと、ベルヴァルド君（長いですね、どう駄したものでどうか）は黙つてしましました。あんな毒ガス兵器……もとい凄まじい缶詰を食べ物と認めるなんて、この子はスウェーデン人なんでしょうか。

小藤先生はその横で、「やだ、かつこいい……」とかなんとか言つてました。違うでしょ、今はそんな場合じゃないでしょ。

そんなことをしている間にも、臭いはどんどん強くなつていきました。私はハンカチで鼻を抑えました。ベルヴァルド君にもハンカチを渡そうと思つたら、既に小藤先生がスカンジナビアクロス模様のハンカチを渡していました。どに売つてゐるんでしょうね、ちょっと氣になります。

とりあえず、穴の開いていない缶を取つてみました。生憎スウェーデン語を知らないのでなんと書いてあるのかはわかりませんが、パッケージのニシンのイラストが、妙に禍々しく見えます。

もつと詳しく調べようと屈んだ瞬間、割れていなかつた窓から「わーはははははははははは！」と人が飛び込んできました。がつしゃん、と再び散るガラス片。今日はよくガラスが割れる日です。

「な、なんですかあなたはー」

なんかもう色々面倒になつてきたので無視しようかと思いましたが、流石に可哀想なので適当に反応してみました。

「わーはははは！ のとさま參上！ 恐れろおののけ恐怖しろー！」

赤いセーラー服を纏い、髪をポニーテールにした人物が、シユール以下略対策がガスマスクを装着して何かポーズを決めました。今年の最も関わりたくない人オブザイヤーが小藤先生からこの人に変更されるぐらいのインパクトでした。

「（小藤先生、なんですか、あれ）」

困ったときの小藤先生。

「（あれ？ のとさま。男の娘。萌えキヤラ。以上）」

小藤先生の全く説明になつていらない説明。……男の子？ え、あれ男なんですか？

「わーははははは、つてあれ！？ 子供いないじゃん、さらいに来たのに…」

わー、この人自分からカミングアウトしちゃいましたよー。いや最初から検討はついてましたけどー。

「くそ、こうなつたらそこにいる眼鏡の子だけでもさらわないと、シユールなんとかを密輸した意味がない！」

そう言つて、大きな麻袋を広げてベールヴァルド君に飛びかかる不審者。いくらなんでもそんな凶行を許すわけにはいきません。私は懐にしまつたスタンガンを取り出そうとし

「そおい」

「ぐえつ！」

すかさず不審者に腹パンを極めた小藤さんの活躍を見て、思わず手を止めました。

「まあ、のとさまは好きだけど、私はヘタキヤラの方が好きなよ。一ヘタリアファンとして、ヘタキヤラ似の子どもを守らないわけにはいかないしね」

ダメージで動けない不審者にさらに何発かパンチを当て、さらに不審者が持っていた麻袋を被せる小藤先生。なんですか、この無双つぶりは。

被せた麻袋を不審者の腰の辺りできゅっと締め、ほとんど身動きが取れなくなつた不審者をなんと細腕で軽々と持ち上げ、そのままどこかへ去つていく小藤先生。何かが暴れるような物音がし、ジッパーを閉めるような音がした後、何かをやり遂げた顔で戻つてきました。

「……テイクアウト、完了」

「何をしてきたんですか貴女は！？」

前言撤回、やつぱり関わりたくない人オブザイヤーは永久に小藤先生のようです。

「いやあ、あの入月一ぐらいで来るんだけど、いつも逃げられちやうのよねえ。今度はしつかり縛つたから大丈夫だと思うけど……」

……もしかしたら、私はどんな人と知り合つたのかも知れません。

「まあそれはさておき、今はガラスとこの臭いをどうにかしなくちゃね」

「ええ、そうですね」

と、ベールヴァルド君がそこで大きなあぐびをするのが田に入りました。

「小藤先生、そろそろお昼寝の時間では？」

「あらいけない、もうこんな時間？ ほらベールヴァルド君、一緒

にお昼寝の部屋に行こうか

「ん」

実際に幸せそうな顔でベールヴァルド君の手をひいていく小藤先生。もう突っ込む氣にもなれません。

割れた窓からは、部屋の臭いに不似合いな春の穏やかな風が吹き込みます。

こうして、私がここへ来て初めてのテロリスト襲来は、なんだかすつきりしない終わりを迎えたのでした。

……その後、あの不審者は『覚えてろよ』と書き置きを残し、脱走していたことが発覚しました。もう来なればいいのに。

普通テロリストはセーラー服を着用しません（後書き）

某キャラはつい覚えて書いた第六話です。ファンの方、本当に申し訳ありません。

前回から大分間隔が開いてしまいました。一ヶ月と一週間ぶりですかな。本当にすいません。

……冒頭から謝つてばつかだなあ。書くことあんまないからいいよね。

最近あとがきのネタが切れ気味です。毎回短編が一個書けるほど書いてたら当たり前か。

もうね、三十回近くこんなあとがき書いてます。毎回毎回よくそんな書けるなと自分でも呆れます。

そろそろあとがきに飽きてきたので、次回のあとがきは書かないかもしれません。

……あとがきの愚痴はこれぐらいにして、そろそろ告知＆募集に入りましょう。

この小説に出てくる保育士さん、及びテロリストさんのキャラを募集します。

最近気づいたんですが、この小説に出てくるオリキャラやたら強い女性しかいないんですね。

幼児の相手は体力勝負なんである種当たり前なんですが、それにしたつてそんな感じのキャラしかいないのは流石にどうかと。

そんなわけで、皆さんのお知恵をお借りしたいと思いました。

募集要項：特になし。年齢はとりあえず二十歳以上であればよし。具体的な口癖があると助かります。

もし何か面白いキャラを思ついたなら、是非リクエストお願い致します。

今回も、読みあつがとうございました。

寝顔は誰だつて天使です（前書き）

ゴスモスさんもやもやするの巻

寝顔は誰だつて天使です

窓ガラスの片付けと、部屋の換気と、窓の応急措置と……。

気づけばだいぶ時間が経つてしましました。もつ子もたちはみんな寝てしまつたのでしょうか？

私は簾とちりとりを片付け、お昼寝部屋へ様子を見に行くことにしました。

起こしてしまつては可哀想なので、気配や足音を出来るだけ殺し、引き戸をそつと開けました。

一面の布団、布団、布団、布団。まだまだ小さな子どもたちが、それぞれ個性のある寝相で寝息をたてています。

子どもは天使とはいいますが、確かにこんな穏やかな寝顔を見ると、その通りだと思つてしまします。

そんなことをしみじみ思つていると。

「…………ふえ…………おじいちゃん…………」

悪夢でも見てしまつたのか、誰かが泣き出してしまいました。あの声は確か……フヨリ君だつたでしょつか？ 相変わらずよく泣く子ですね。

ともかく、泣き止ませないわけにはいきません。私は声の聞こえるほうへ忍び足で向かいました。

「わ、フヨリちゃんどうしたの？ 何かこわーい夢でも見ちゃつたかなあ？」

と、私がフヨリ君の元へ向かう前に、誰かが彼に話しかけました。

「ふ……え、ゆうかせんせ…………」

「そーだよう、ぬーべーとGIG美神につににつに共感したやつ」と有名な優華先生だよう

声の主 優華先生はフヨリ君を抱き上げ、背中をぽんぽんさります。

「あのお、おじいちゃんがね…………」

「おじいちゃんがどうしたのう？ 大丈夫だよう、怖い夢なら優華先生がぽーんとえんがちょしちゃうからねえ」

「うん」

「ほーんとえんがちみ」つて一体何をするんですか、とこう私の困惑とは裏腹に、フーリ君は優華先生にさすらわれるまま泣き止み、そのまま寝てしまったようでした。

あー！？」「…………あ、あれえ！？」「…………」ジジジジジスモスさん、いいいいたんですか

優華先生は私に気づくと、先程とは一転した激しい動搖を見せました。

れるなんて」

人に何かを評価たいときは、いきなり本題に入ってはいけません。特にこのように心のバリケードを張り巡らせている場合は、軽くジヤブを打つてから、「ぽーんとえんがちよ」について問いただす機会を窺うのです。

「そ、そんなことないですよ。白木先生とか、もつと凄い先生だつていますよ。私なんてまだまだです」

……なんでこの人、こんなに拳動不審なんですかね。まあどうでもいいですが。

後方を凝視しながら絶叫しました。

「 ゆ、優華先生！？ どうしたんですか！？ そんなに大きな声出したら子どもたちが起きてしまいますよー？」

えあしゃあやの……あしません私ちょっと用を
思いだしちゃつて……ナビもたまのじと、よひしへお願こしまわつ

!

言つが早いが、優華先生は小走りで部屋から出ていつてしまいま
した。なにやら、切羽詰まつた様子でしたが……。

「……一体なんなんでしょう?」

しかし、それからの私は、優華先生の叫び声で起きてしまった子どもたちのお世話で奔走することになり、結局「ほーんとえんがちよ」や優華先生の奇行の意味はわからずじまいでした。

-1?

卷之三

「皆さん落ち着いてください！ 私がいますから、とりあえずもつ
叫ばないで……！」

部屋を埋め切れる泣き声に鼓膜をやられながら、ふと思いました。
……いへり寝顔が天使でも、中身も天使だとは限らないのです

寝顔は誰だつて天使です（後書き）

九條さんお許しください！

そんな感じの第七話です。すいません。

今回登場した優華先生は、九條成瀬さんからのリクエストを採用させていただきました。

九條さん、本当にありがとうございました。そしてすいません。初っぱながら崩壊氣味ですいません。本当にすいません。

そんなわけでリクエストですが、まだまだ募集させていただいています。もしよかつたら応募してやってください。

あと誰かこの幼稚園の正式名称考えてくれませんか？

それにしても最近、「へたりあようちえん」なのにちつともヘタキヤラ活躍してないなあ。

ていうか、時間軸ではまだ一日経つてません。どうなんだこれ。一日長すぎだろ。

多分次回あたりでお迎え編やつて、それから一日一話方式になると思います。これ以上一日が続いてたまるか。

それでは、また次回もお会いできたら幸いです。

想定外のお迎えですね（前書き）

ゴスモスさんやりきれないの巻

想定外のお迎えですね

……思えば、長い一日でした。そう、まるでもう何ヶ月も経つたよつた。

しかし、もうそれもおしまいです。よつやく……よつやく！ お迎えの時間が来たのですから！

……だけど、一体どうするんだよつた。聞くとこには、この幼稚園は各国の要人の子女を集めているそうですが……一体、子どもたちをどう帰すのでしょうか？

そんな私の疑問を見透かしたように小藤先生が言いました。

「大丈夫よ。子どもたちはみんなお家へ帰るから」

「はあ……でも、どうやつて？」

「見ればわかるわよ。もうすぐ送迎用の……」

小藤先生の言葉は途中でわからなくなりました。
何故なら。

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ……

「な、なんですかあのへりは！？」

お庭の上空に、爆音と共にプロペラを回す一機のヘリコプターがホバリングしていたからです。

「ああ、やつと来たわね。ローマ爺ちゃん……もとい、ヴァルガスさん」

一見緊急事態なのに、落ち着いた小藤先生の声。それに応えるかのように、へりが緩やかに庭に着地し、中から一つの影が出てきました。

それは、茶髪のかなり体格が良い男のようでした。おそらくはラテン系の欧米人でしょう。スーツをきつちり着こなした姿でしたが、その表情はまるでいたずらっ子のようでした。

私は、その男性をどこかで見た覚えがありました。しかし、どこだつたのか……そういえば、小藤先生が先程彼のことを『ヴァルガ

スさん』と呼んでいたよつな……。

まさか？

「ヴァルガス財団総帥……？」

ヴァルガス財団。説明は面倒なので省きますが、絶大な権力やら富やらを持ち、イタリアを裏から牛耳るといわれる悪の組織っぽい団だと思つてください。平たくいえばある種のマフィアですかね。で、あの男性は、やたら若いことで有名なヴァルガス財団の首領。名前は……忘れましたが、年齢は確か七十歳ぐらいはありましたか。

「な……なんであるんな超絶VIPがこんなところに……」

「そりゃあ保護者だからよ。フェリ君とロヴィ君の

事も無げに言う小藤先生。マジかよ……げふんげふん、マジですか。

「おつなあ姉ちゃんたち！ 僕の可愛い孫たち出してくんねーかな？」

と、ヴァルガス翁は私たちに気をくな様子で話しかけてきました。姉ちゃんって、貴方のほうがよほびオールドでしじつ。

「はいはい、今連れて来ますね」

小藤先生はにっこり笑つて部屋に行き、やがてフェリ君とロヴィ君（フェリ君の兄。フェリ君より若干生意氣）を連れてきました。

「それじゃあフェリ君、ロヴィ君、また明日ね～」

「うん！」 「うん」

「今日もありがとうな！」

そう言つと、ヴァルガス翁は両腕それにフェリ君とロヴィ君を抱え、へりに乗り込みました。

そして、へりは再び上空へと去つていきました。

「……あの、小藤先生

「何？」

「子どもたちの送迎つて……びつするんでしたつけ？」

「ああ、特別に送迎用のジエット機があつて、それを使つのよ」

「……そうですか……」

私は、何かもういろいろとやりきれなくなり、空を見上げました。
空には、一本の飛行機雲を作るジェット機が。

「なんていふか……もう、ひどい話ですね」

何がひどいのか、自分でもよくわかりませんが。

想定外のお迎えですね（後書き）

- Q ．いくらジエット機でも世界中を廻るのは時間かかるよね？
A ．あればコンコルドだつたんだよ！
Q ．いくらヘリコプターでも（ry
A ．ヴァルガス財団特注の云々かんぬんだつたんだよ！
Q ．全般的にひどくね？
A ．本当に申し訳ありません！

次回からは一日一話みたいな感じになりますよ。

桃太郎は生まれたときから強かつたんですね（前書き）

コスモスさん絵本を読むの巻

桃太郎は生まれたときから強かつたんですね

今日は、『桃太郎』という絵本の読み聞かせをすることにになりました。

「むかーし昔、あるとこに」

「先生、昔つていつの時代ですか？ あるとことは具体的にどこなんですか？」

私が知るわけないでしょ。ルート君は眞面目ですけど変なところで融通が利きません。

「……室町時代、今でいうとこの岡山県の某所に、おじいさんはおばあさんがいました。おじいさんは山く芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」

「先生、芝刈りってなんだい？ おばあさんはどうして洗濯機を使わないんだい？」

「芝刈りは芝刈りです。室町時代に洗濯機はありません。おばあさんが川で洗濯していると、川からどんどんぶらぶらと大きな桃が流れきました」

「川に物を捨てちゃいけないんだぞ！ 環境破壊だ！」

「昔は今より自然が多くて条例も緩かつたんですよ。びっくりしたおばあさんは慌てて桃を持ち帰り、おじいさんがそれを切つてみると、中から赤ちゃんが出てきました」

「先生、なんで桃を切ったのに赤ちゃんは切れなかつたあるか？」

「サムライだからシラハドリしたんぢやないでしょ。おじいさんとおばあさんはその赤ちゃんを、桃から生まれたから『桃太郎』と名づけ、大切に育てていきました」

「先生、いくらなんでもそのネーミングセンスはひどいと思つた」「赤ずきんとか灰かぶりとかよりはマシです。やがて、桃太郎は立派な男の子に成長しました。ある日のことです。桃太郎は、都で鬼が暴れて宝物を奪つていぐ、ところづねを話を耳にしました」

「先生、鬼なんているはずないだろ。何いつてんだ？」

「妖精がいるなら鬼の一匹や二匹いてもおかしくありません。地

郎は鬼ヶ島へ行き鬼を退治することにしました。おばあさんは桃太郎のために、一つ食べれば元気百倍になるきびだんごを作り、桃太郎に持たせてあげました」

「先生、それってバイアグ？」

黙らつしゃい。桃太郎が鬼ヶ島に向けて歩いていると、犬、猿、キジが現れ、桃太郎のきびだんごを欲しがりました。桃太郎はきび

だら」をあげるかわりに、三回にお供になつてもらいました」

「野犬に襲われて二ホンザルの集団に囲まれてキジの凶器のごとく
…… 熊や牛などもかく そんな動物がなんの役に立つんだ？」

鋭いくちばしにつつかれてから言いなさい。桃太郎と三匹は鬼ヶ島に上陸しました。襲いかかる鬼たちもなんのその、桃太郎は刀で鬼をばっさばっさと斬り、三匹は噛み、引つ搔き、つつきの大暴れ。

「桃太郎 TUEEEE!!」

「はいはい桃太郎」。そうして桃太郎は宝物を取り返し、奪われた人に返してあげました。桃太郎は都の人々に感謝され、街一番の美人と結婚させてもらいました。三匹も沢山活躍したので「ごちそうをたらふく食べさせてもらいました」。桃太郎は都におじいさんおばあさんを招き、末永く幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし

「先生、この話の教訓はなんですか？」

「そうですね……『勸善懲惡、つていうか桃太郎鬼叩きのめす以外
善やつてないじやねえか』つてところでしょうか」

「先生、それうひ主の感想じやないんですか？」

桃太郎は生まれたときから強かつたんですね（後書き）

桃太郎。

実はこの小説を続けるべきか悩んでます。
誰か助けてください。

ピカソの絵が下手だと思った方がちよつと来てください。（前書き）

ゴスモスさん個性的な絵を見て絶句するの巻

ピカソの絵が下手だと思つ方ちよつと来てください

今日は、みんなでお絵描きをすることになりました。お題は自由。子どもたちはどんな絵を見せてくれるのでしょうか。

「イヴァン君が描いているのは……ひまわり、ですか？」

「うん。僕、ひまわりが大好き」

イヴァン君が描いていた絵は、画用紙いっぱいに大小様々なひまわりが咲き乱れたものでした。

「いつか世界中をひまわりでいっぱいにするのが僕の夢なんだあ」

「それは素敵ですね。頑張ってください」

「うん！」

子どもの夢は純粹で素敵ですよね。去り際にイヴァン君が、「いつかみんなんな僕の家……」と歌つていたような気がしますが、多分気のせいでしょう。

「ヨンス君は何を描いてるんですか？」

「もちろん、俺の国なんだぜ！」

ヨンス君がぱっと広げた画用紙には、太極旗、いわゆる韓国の国旗が描かれていました。

「……なんというか、その、円が上手に描けてますね」

「だろ！？ なんだぜ！」

ときどき、本当にときどきですが、この子の将来がひどく不安になります。

「菊君は……いつも通りですね」

「私の嫁です」

緑色の髪をツインテールにした女の子の絵でした。クレヨンだけでアニメの絵を完全に再現する才能は凄いとは思いますが。

「シナティちゃん！ シナティちゃん！ 可愛いあるー！」

「……まあ、ここまで似てなかつたら、版権にも引っ掛けられないですよね」

既視感はありますが、ぎりぎりセーフだと信じます。

「兄さん兄さん結婚結婚兄さん兄さん兄さん兄さん兄さん兄さん兄さん結婚
結婚結婚結婚結婚兄さん兄さん兄さん結婚」

「結婚はせめてあと十年待ってからしてくださー……」

「画用紙一面にイヴァン君の似顔絵と『結婚』の文字……誰かこの子をなんとかしてあげてください。私には無理です。

「山羊を描いたのである」

「あら可愛い。バッシュ君は動物が好きなんですか?」

「お兄様を描きました」

「上手ですが……なんでバッシュ君は女の子の服を着てるんです?」
田がキラキラしてゐる子にはなかなか注意しづらいですね。ともあれ、兄妹仲が良さそうで何よりです。

「小鳥のようになつこい俺様ー!」

「もう小鳥を描いたらしいんじやないでしょ?」
(僕はクマ吉さんを描いたよ……)

「知ラナイ人、描イタ」

「……何故、園内に熊があれ? 今、誰か何かいました?」

「ヴォー、見て見てー、爺ちゃん描いたよー」

「このバカ弟! なんで俺と同じの描くんだよー」ノノヤロー!」

「ヴォツ! ? 『じめんなさい……』

「こらこら、兄弟喧嘩はやめなさい」

「俺は妖精さんを描いたぞ」

「わー、夢が溢れますねー(棒)」

「……」

「クラクレス君、今はお昼寝の時間ではありませんよ」

ふつ……題材はちょっとアレなのが多いですが、みんな真面目に描いてゐるみたいですね。ちょっとアレなのが多いですが……

「……あれ。フェリクス君、何を描いてるんですか?」

フェリクス君の絵は、絵というよりは画用紙をただピンク色に塗つてゐるだけのよう見えました。

「ピハクって超可愛くない? だからピンクを描こうねえよ」

「

……わいわいだいの幼稚園。

ピカソの絵が下手だと思う方が多いと来てください。（後書き）

どんな絵を見ても決して否定せずに褒めて伸びやうとする先生たちは凄いと思います。

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが（前書き）

「スモスさん特に何もしないの巻

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが

今日は特にやることがなかったので、子どもたちがどんな遊びをしているか観察することにしました。

庭の中央辺りを見ると、何人か集まって何かしていよいよでした。一体どんな遊びなのでしょうか。

「ヒーロー、ここのするものこの指止まれ！」

最初に高々と人差し指を掲げたのは、銀髪と赤い眼が目立つギルベルト君でした。

「おー、ええな！ 僕やりたい！」

「じゃあお兄さんも」

そしてギルベルト君の元へ一人の子が。やや色黒なほうがアントニーノ君、ウエーブがかつた金髪の子がフランシス君でしたか。

「面白そつじやねえか。僕もやるぜ」

「わーい、僕もやるー」

さらに、亜麻色の長い髪をゆるく結んだエリザちゃん……エリザ君と、女の子みたいな姿をしたフェリ君がやってきました。

「俺入れて五人か。結構集まつたなー」

よしよし、とギルベルト君が頷く。

「じゃ、グーチーでわかれんぞー」

「おー」

グーチーとはジャンケンの一種で、グーとチョキだけを出して二組に分かれるためのものですね。グッパーとかパー、チョキとか、地域によつて微妙に名称が異なるとか。

「せーのっ、グーチー、グー、チー、グー、チー、ジャス！」

ギルベルト君のかけ声でいっせいに手を出す子どもたち。内訳は、グーがギルベルト君、エリザ君ちゃん。チョキがアントニー君とフランシス君でした。フェリ君はパーを出したので除外。

「間違えちゃった……」

「しょうがねえなあ。じゃ、フエリちゃんはお姫さま役なー。」

「うん！」

「なんでしょう。とんでもない突つ込みどころをスルーしてしまつたような気がします。」

「ヒーロー役は譲らねえからな」

「奪い取つてみせるさ、この拳にかけて」

ギルベルト君とフラン시스君の、およそ園児がやるとは思えない熱いやりとりの後、ヒーローの座をかけてジャンケン。

「「ジャン、ケン ポン！」」

フラン시스君が出したのは パー。対してギルベルト君は

「ま……負けた……俺が……」

「へつ！ 俺がグーしか出さないと思つたら大間違いだぜ？」

ギルベルト君の手はチョキ。この勝負、ギルベルト君の勝ちですね。

「じゃ、俺たちがヒーローでお前らが怪人なー」

「しようがないなー……」

「俺は構わへんよ」

そして子どもたちは「手にわかれました。フエリ君がどうしようどうしようとおろおろしてましたが、アントーニョ君に「お姫さまやから悪者に捕まつてるんやでー」と手を牽かれていきました。

そしていよいよヒーロー「」が始まります。

「はーはははー！ ついに捕まえたぞ、アドリアーナ姫！」

「きやあーたすけてー」

「だめやでーもう逃げられへんでー」

結構ノリノリなフラン시스君と、いつもと全く変わらないアントーニョ君。フエリ君は……男にしておくにはもつたいたいくらいのお姫さまっぷりです。

「そこまでだ！ 怪人ども！」

「なつ、誰だ！？」

と、上方から声が。見ると、太陽をバックにジャングルジムに

「王立ちする」一つの影が。

「うう！」

勇ましい掛け声と共に飛び降りて来たのは、今更説明することでもないですが、ギルベルト君とエリザ君ちやんでした。

「正義のハートが悪しきを絶やす！」

「頭の小鳥が燃えろと唸る！」

「大鷲戦士オレサマン、参上！」

ポーズを決める一人の後ろで、ビーンと爆発が起こりました。どこからそんな火薬が出たのでしょうか。

……それでも、園児のセンスにケチをつけるわけではないですが、大鷲戦士オレサマンはダサイと思います。

「現れたなオレサマン！」

「返り討ちにしたるで！」

そしてノリノリな怪人勢。フヨリ君そっちのけで戦闘が始まります。

「怪人へんたい男は俺がやる！ 怪人トメイトウ男は頼むぜ、バーディー！」

「おう！ 任せとけ、マニッシュ！」
なるほど。どうやらエリザちゃんはオレサマン・マニッシュ、ギルベルト君はオレサマン・バーディーという名前という設定らしいですね。そこらへんのネーミングセンスがわりと的を射ているのが逆に腹立たしいです。

「ていつ、りあつ！」

「やつたな、このお！」

「喰らええつ！」

「ちよつ、フライパンは反則！」

……文字にするとまるで本当に戦っているみたいですが、実際はただの園児のじゃれあいですからね？ そこは間違えないでください。

一方そのころフヨリ君は。

「み、みんなやめて～。僕のために争わないで～」「

……もつドン引きするくらいお姫さましてました。

「待つてろよ、フヨリちゃん！ 僕が必ず助け出してあげるからな

！」

「ちやうで！ フヨリちゃんを助けるのは俺や～！」

「いや、お前怪人だろ！？」

「なんでもいいからフライパンは使わないで～ ほんとお願ひ～！」

「ぞさくさに紛れてどこ触つてんだよ！」

「バレたー！」

皆さん刮目して「ご覧ください。これが、一人の男児を巡つて争う四人の園児の姿です。そのうち一人は女の子ですが。

……これが中高生以上だつたらいろいろあぶない光景ですね。いかにも小藤先生が好きそうなシチュエーションです。

私は溜め息をついて椅子から立ち上がりました。

「こら、喧嘩はやめなさい」

「「「喧嘩じゃない！」」「」

「はいはい」

私はやはり、黙つて見ているより積極的に関わる方が性にあつようです。

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが（後書き）

最近特撮にハマつまくつてひやつぱうしてたらこんな内容になりました。

オレサマンの元ネタは逆転裁判のトノサマンです。実写映画化おめでとう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6855o/>

へたりあようちえん。～世界がもし一つの幼稚園だったら～

2011年6月5日13時40分発行